

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所



☆ 着物から服へ

発行日***2008年10月1日

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

今回は2、5枚なので一部50円です

「死にたい…」——祖父の口癖



八十二歳で亡くなった明治生まれの祖父は、晩節をむかえて、腰は90度近くに曲がり、痩せ衰え、顔はしわくちゃだった。思うように動けない自分の不甲斐なさを嘆きながら、土間で藁仕事をしていた。食事をする時も嘆きつづけ、しかめ面ばかりである。家族は爺さんの嘆きを聞きながら、不機嫌な顔を見ながら食事をしなければならなかった。そんな爺さんに「死んじゃったら」と心ない言葉をかけてしまった覚えがある。◆爺さんは、老いて満足に働けなくなっても、三度の飯は一人前に食べずにはおられない自分をいまましいと思っていた。貧しい農村で、一人前の働きが出来なくなっても若い者と同じように食べるということに、爺さんは負い目があったようだ。家族の表情にも「爺さんのくせによう食べてやなあ」という暗黙の心情を読んでいたのかもしれない。◆爺

さんの人生を振り返れば、子どものころから働き通しに働いてきたが、楽な余生は待っていなかった。婆さんは足が弱く百姓仕事が十分にできなかった。そのぶん爺さんは一生懸命に働き、田畑を耕し山林を育てた。村役も引き受け、灌漑工事も成し遂げた。◆爺さんは婆さんの介護もした。母屋に婆さんの為の寝間を設け、便所に行けない婆さんのために床をくり抜き下にタライを置いて、世話をしていた。汚れ物も爺さんが洗っていた。◆婆さんが亡くなると、爺さんは寝床を離れの小屋に移した。草刈などの野良仕事もできないほどに弱り、一日中小屋にムシロを敷いてあぐらをかき縄を編んでいた。私は菓子などを持っていても、受け取らずに「わしゃ、もう何んにもできん。そんな菓子はもったいないからお前食え」と言った。坐っていたムシロの端にはタンツボが置いてあった。タバコを吸っていた為か咳き込んでタンを吐き出していた。◆縄を編む手を水桶につけながら「わしは、はよう死にたい」と言った。中学生になっていた私は「早く死んじゃったら楽やろな」と思っていた。そんな小屋の生活が幾冬か超えて、とうとう寝込んだ。それから2年程で亡くなった。◆爺さんが、死に近づくにしたがって己の身に訪れる老いを嘆き、生きる苦しみにもがく姿を見続けた。爺さんの老いる姿には惨めさがただよっていたが、その生きざま、死にざまというものは、私たちに何か大事なことを教えてくれていたような気がする。父は生前、母に「お前が寝込んだら、わしが大事に介護してやるから安心せい」と幾度も言っていた。(嘉)

*****いい人 いい街 いい笑顔*****

ご融資のことならお気軽にどんなことでもご相談ください。

摂津水都信用金庫芥川支店

TEL 072-681-1871 * FAX 072-681-7567

立木 理

まだそれほど認知症が進んでいなかった頃、母が病院で横たわったままぼつりと言った。「私の人生は、結局世を繋いだだけだったのかなあ」と。

全く失礼この上ないことだが、母が人生を考えていたとは吃驚した。一人の人間としてではなく、母としてしか見ていなかった自分が情けない。男でも女でも人でもなく、唯一無二の母と見ることが強過ぎる余りしつかりと母自身を捉えていなかった。昨年杉本真人の「吾亦紅」が流行った。ほぼ同世代として何となく心情が分かる。彼には最後に母への想いだけが残った。私も同類かもしれぬ。

その母は、世を繋いだことでその「使命」を果たした（まだ生存していませんが）。終ぞ「使命」などとご大層なことを考えることなく、社会に出てからは、ただ己の満足と生活費を稼ぐことが人生の目的であるかのように過ぎて来た。

ところが昨年自身の状況も一変し、過去を顧みたり、人生を考え直したり、この先の進み方に迷ったり、気持だけ忙しく過ぎている。日々の生活を考え

ると悠長なことを言っている状況にない。だが、この年齢になれば何か社会に返さなければならぬとの思いもある。人様のことを慮る余裕などありはしないが、それでも残りの時間で何か出来はしないだろうか。「使命」とまでは言わないが、生まれ来て確実に死に向かう身なれば、一つくらいは何かのお役に立たねばなるまい。

世相は、いつの間にか、金、金、金、自分、自分、自分、周りのことなんかどうでもいい、である。少し前の流行言葉「そんなの関係ねえ〜」さながらの時代に我々はしてしまった。時として世相に嫌気を覚えるのは、私だけだろうか。これ程環境破壊が起こると、ようやくそれはいかんとなり始めたかの感あるが。知らないだけで、人様のために生きている方もたくさんいらつしやることだろう。私の残り時間をまだまだ人様のために使うこと可能なはず。

そんな風に思っている中、たばこが自動販売機で買えなくなり、近くのコンビニへ行き始めた。四、五回目に行った時のことである。私が店に入ると、その店員さんは直にタバコの棚へ向かいいつもの銘柄を二箱持ってレジに立ち、「これでよろしいですか」と明るく声を掛けてくれた。今朝も寄った、「おはよう御座います」と投げ掛けられ、私

も自然に「おはようございます」と返す。つり銭を貰って立ち去る私に「有り難ございます、行ってらっしゃい」と元氣よく送ってくれる。（タバコを止めようと思っていたが、これで止められなくなった・・・冗談。）

以前からお勤めなのか、近くの人のなのか、どこのどなたかは知らないが、気持の良さに何時も感心させられる。指輪をされているから奥様だろう。女性の年齢はほとんど分からぬものだが、三十〜三十五歳位ではなからうか。これまでにどのような仕事をされて来た方なのかと、つい想像してしまう。

私のように禿げたオッサンにも、格好いい若者にも、誰にでも、わけ隔てのない気持のいい応対振りに感心させられる。どこにでもあるマニュアル化された機械的な言葉ではなく、人の温もりが伝わってくる短い言葉に喜びを覚えてしまう。失ってしまった人と人との交わりが蘇る。（たばこ会社に感謝しなければ。）

その仕事は、肉体労働、頭脳労働と並ぶ第三の労働形態で「感情労働」と呼ばれるもの。「自分の気持を押し殺し、相手に合わせた言葉や態度で応対する仕事」と定義付けられている。が、彼女は、自分を殺しているようにも、相手に合わせるようにも見えない。「もっと買

当然思えない。ただ普通に声を掛け、普通に応対されている。それなのに他の方と違う。何かが違う。多分心根が違う、ベースが違うのだろう。仕事の中に、はつきりと彼女自身の心根が出ている。それが言葉の音に、響きに現われ、私たちに心地よい感情をもたらしてくれる。

彼女は、何時間か勤務の中で、今日この日のこの時間に出会った人の為に「心地よさ」や「すがすがしさ」を振舞っている。有り難うと言いたい。

この先の仕事を模索している私は、如何なる仕事であれ、その仕方次第で仕事以上のものを生み出し、無形であっても人様のお役に立てるのだと教えられた。

生きるとは、人との関わりだ。その関わり方の中から、「自身の終わりよう」も見えてくるのではなからうか。「使命」を果たすことなく終わりが来るかも知れないが、「何時死んでもいい自分作り」が、私の課題となっている。



ある小説家の死

明石 幸次郎

ず、ただただ病院で生物的に生かされているだけの存在になって仕舞いませぬ。最後は意識もなく、ただ生きながらえているだけの惨めな“死に様”になってしまふこともあります。

膝臓癌で二年前に亡くなった作家の吉村昭さんは、末期癌になった時点で、本人の希望により病院を出て、自宅で療養していましたが、亡くなる前日の夜に点滴の管を自ら抜き、首の静脈に埋め込まれたカテーテルポートも引き抜き、その直後に看病していた長女に「死ぬよ」と告げたという。遺言状にも「延命治療はしない」と本人が明記していたので、家族は本人の意思を尊重して延命治療はせず、吉村さんはその数時間後に息を引き取ったと言う事ですが、ご家族によると死の直前まで意識はあったという。

「家にいたからからこそ、自分の死を決することが出来て、良かったと思う」と妻で作家の津村節子さんは泣きながら感想を述べたと言うことです。(朝日新聞による)

この作家のような死に方をするには、日頃から死に向き合い、死期を迎えた時にどうするか覚悟を自らが前もって決めておかないと、いざその時になってジタバタしたり、周りの者も延命策を取るように希望したりして、その結果は、本人は意識が無いにも拘

であつた愛おしい弟が先に逝つてしまふという、何ともいえない無常感がこの小説には描かれていて、身内の死を扱った秀作だと思えます。(新潮文庫版で出てます)

吉村昭さんは今から二十年程前に「冷い夏、熱い夏」という小説に、実弟が癌に冒されてから、その死に至るまでの壮絶な闘病生活の一年間の様子を書いていきます。癌に罹ったことは、ずっと本人に隠し通して、弟をどうしても助けたいと思う気持ちと、医学的にはもう助からないので弟の死の一ヶ月前から家族に代わり葬儀の段取りを考えて、事前に葬儀屋と打合せをしたりする。本人の中では弟を何としても助けたいと思う肉親に対する激しい思いの気持ちと、その反面、弟の死後に家族がジタバタしないように、きつちり手を打っておきたいという冷静な気持ちと、どうしようもなく同居し葛藤する心理を描いている場面があります。

作家自身は二十歳位の頃に肋膜炎と肺の病気に罹り、その手術で左胸部の肋骨を五本取るといふ、生きるか死ぬかの大変な苦痛が伴う大手術をして、若い時からいつ自分が死んでもがおかしくないという状態にあつたようです。現実には、自分の闘病中ずっと親代わり以下の世話までしてくれた、元氣

先月号にも書きましたが、歳をとる事は、ただ歳を重ねる延長線に漂うものではなく、如何に歳をとり、如何にこの作家のように「自分の死を見つけない」と言う自助努力の歩みを続けなければならぬという事です。生と死は背中合わせで「歳月、人を待たず、その死も又、その人を待たず」なのでしようか。

中国のことわざに「活到老、学到老」(ホフアタウロウ、シエタウロウ)というのがありますが、死ぬまで学ぶ、勉強をするという意味だそうです。

峠

歩いて峠を越えるということは、現代の旅行ではまずない。日本には峠の数は大小一万余りあるだろうと柳田国男は推測するが、その多くが衰亡し、峠につづく山路は廃道となっている。

「旅人は誰でも心づくべきことである。頂上に来て立ち止まると必ず今まで吹かなかつた風が吹く。テンペラメント(気性)ががらりと変る」また「峠越えのない旅行は、まさに飽(かん)のない饅頭(まんとう)である」と柳田は書いているが、明治の後半には峠がすでに衰退しはじめていた。

山岳会の向こうを張って「峠会」を組織しようと冗談交じりにいうが、そんな会をつくらずとも、峠巡りには、信飛の高山を縦走するのは異なり、新しい発見があるにちがいない。

「峠」という国字はだれがつくったか知らないが、「とうげ」という大和言葉にはびつたりである。漢字にはなぜ「峠」にあたる文字がないのだろうか。峠には重要な意味がなかったのだろうか。

柳田は、「とうげ」は「たむけ」からきているという通説を疑い、「搦(たむ)と同じ語源の「たわ」「たをり」という古代語をひいてきている。地名の「たわ」には「札」があてられる。これも国字である。(山猿)

身近な死

私は八人姉妹の二番目に生まれました。生まれた時は関東大震災が起きた年で、もう少しで家の下敷きになりかけたのですが、親の機転で助け出されたそうです。五歳の時は自転車にひかれ、七歳の時には家の普請中に二階から逆さまに落ちたにもかかわらず、幸い怪我ひとつしませんでした。このようにいろいろな事故や災いに逢いながらも、どうにかこの歳まで生き長らえてきました。

八人姉妹といっても、八人がみな元気に育ったわけではありません。三人はこの世に生を受けながら、幼くして亡くなっています。三人とも弟、妹でしたので、私の脳裏には、亡くなった瞬間のこと、呼吸が止まり二度と目を開けることのない弟や妹の姿が焼きついて、忘れることはできません。

弟が、生後一年足らずで亡くなったとき、母の嘆き色はとても深く、悲しみの底に沈んでいました。

私が猩紅熱にかかったとき、すぐ下の妹にうつってしまい、けっきょく妹は治ることなく、この世を去ってしまいました。その妹の死は、私には大変なショックでした。いつまで経っても

妹の事が忘れられなくて、悲しくて仕方がありませんでした。

子どものときに、三人の弟や妹を亡くし、その死を目の当たりにして、死というものは簡単に訪れるものだと思えました。いままで息を笑っていた妹たちが、さよならも言わずなんと簡単に逝ってしまうのか。そして、妹たちは何処へいつてしまったのだろうかと、非常に虚ろな気持ちになりました。

父は、朝起きると同時に脳溢血で倒れ、そのまま心臓が止まって亡くなりました。私はそのとき嫁ぎ先の大阪にいましたので、電報で父の死を知り、東京の家に帰ったときはすでに、父はお棺の中でした。

それ以後しばらくは、家族みな大病を患うこともなく、平穏な時が過ぎてゆきました。姉妹五人はそれぞれ家庭を持ち、子宝にも恵まれました。

ところが、理想的な健康家族と信じてた我が家の当主が膀胱ガンになったのです。

一回目の手術は、朝の十時から夜中の一時までかかる大手術でした。このとき輸血が必要となり、私から二人分の血液を採血しました。大阪府成人病センターの五人の医師は返り血を浴びて、「こんな大手術はこれまでしたことがない」と言っていました。手術室から出てきた主人は私に「楽になった。

ありがとう」と笑い顔を見せてくれました。

ところが、それから一月ほどして、縫いあわせた部分が裂けて臓器が飛び出してきたのです。私は仰天しました。せつかくの大手術の甲斐もなく手術のやり直しです。主人は絶食となり、それ以後何も口にすることはできませんでした。

しばらくして、腹の臓器に腐敗物が溜まっていることがわかり、それを取り除く手術をすることになったのです。その手術は三時間ほどかかりました。しかし、手の施しようがなくそれが最後でした。

医師たちが治療に精魂を傾けてくれた三カ月の闘病でした。付き添った私は、主人の死の衝撃が重くのしかかり、深い悲しみに落ち込んでしまいました。

嘆き悲しむこと半月。側で見ていた姑が優しい口調で私を諭します。

「どんなに悲しんでも、かえってこない。あなたは、お寺をおもりにしてゆかねばならぬ大役があるのよ。悲しむのはそのくらいにして、いつかあなたも仏様のくにへ向かって行かねばならぬ日があるの。お父さんも先に行って待っていて下さる。同じお浄土に生まれるように精進させてもらわねばいけない。先に行って待っていてくれるのに、

いつまでも泣いたり、この世に呼び返すような迷いを起こさせてはいけないのよ。心からお念仏を称えて極楽往生を願ってあげなくてはね」と静かに言われたとき、私は眼がさめたように自分に還る事ができました。

「あなたが、しっかりと門徒さんをおみちびきしなければならぬでしょう」と言われた姑の顔は、毅然として仏様のようでした。

私は、眼がさめて穏やかな心になり「はい、わかりました」と姑を見上げました。それからは、心が引き締まり、あふれる涙も自然におさまってゆきました。

お別れが悲しいからと、一緒に歩いてゆくと言われれば「ちよつと待つて」と、自分の命は、終わるのを自然に任せて、今まで続いています。

その母が亡くなる二、三日前「私は今、きれいな花の咲いているところを歩いているわ。これが極楽かしら。あなたに見せてあげたい」と言われるので、お婆ちゃんはおかつとおかしくなったのかしらと思えました。

その翌日の夜明けに、母は眠ったまま亡くなりました。笑みを浮かべたおだやかな顔でした。私も、願うらくは、笑い顔で眠るようにおむかえへを頂きたいものだと思います。

私の生き甲斐は、お念仏一筋です。

「城跡公園の右近像」

福嶋 努

高山右近は、高槻藩の藩主であり、高槻城の城主であったが、その期間は足かけ十三年（一五七三〜一五八五）で、そんなに長い間高槻の殿様だった訳ではない。にもかかわらず右近、右近といえは高槻というのが常識のようで、右近は、全国的に知られたった有名な人なのである。

阪急高槻市駅南出口を出てすぐ右に曲がると、城北通りのアーチが見えてくる。アーチをくぐり繁華街を南に進み、北大手交差点で国道一七一号線を横切ると、やがて右側に、高槻カトリック教会・高山右近記念聖堂、高槻現代劇場、野見神社が現れる。野見神社の前を左に折れると高槻市立しろあと歴史館にたどりつく。駅からここまで来るのに、十分たらず歩いてきたことになる。

しろあと歴史館は、普段は高槻城の様子や城下町の人々の暮らしなどを展示している博物館で、城の三の丸があったところに建てられている。南隣りにある中学校の校庭のさらに南側には、高槻城跡公園が広がっている。この辺り一帯は、明治七年（一八七四）に破



却される時まで、その偉容を誇っていた高槻城の跡地なのである。

公園には、城郭は残されておらず、城を守ってきた内堀・外堀の姿も見当たらない。唯、城の石垣や堀を模した池が美しく創られている。池から少し離れたところに、歴史民俗資料館があり、郷土の暮らしや生業が伺える民具などを展示している。緑ゆたかな園内には、楽しい子供用の交通広場があり、のびやかな遊園地もある。この城跡公園は、現在は、憩いの場となっており、広く市民に親しまれている。公園の入口付近の高台には、十字架を持つ高山右近の大きな像が建っている。直立した姿勢であたりを見守るようになっている、堂々としたその容姿は印象深いものである。

最近になって知ったことであるが、この右近像と同じものが、富山県高岡市の高岡古城公園の入口にも建てられているという。高槻の右近像がどうして高岡に……という疑問を持ったが、すぐに納得した。高岡城の、一六〇九年の築城に高山右近が大きくかかわっていたことから、それに因んで高槻市から高岡市に寄贈したというのである。

金沢の「兼六園」の三倍の広さを保持つと町の人が誇る高岡古城公園。この古城公園にも、城郭は、残されてはいないようである。しかし、水濠だけは往時のまま。水濠面積は、城城面積の約三分の一。内堀、外堀ともに、幅は三十〜四十メートルあり、現在でも満々と深い水をたたえているという。発掘調査によると、右近時代の高槻城の堀の幅は二十四メートル、深さは四メートルもあり、高岡城の堀に似かよった大きさであったという。

右近は、山城とは異なる平城の設計を得意としていた。高槻城も高岡城もともに平城で、広い「①」を持つていた。平城の場合は、防壁上広い堀が必要になるが、両城ともに、大きな堀のお蔭で大変頑固な城となっていたという。

右近は、高槻城主になった二十一歳の時から明石へ移るまでの足かけ十三年の間、川の水を上手に利用して大き

な外堀を作ったり、町屋を取り込んで城域を一層広く拡張したりして、強固な城づくりのための工夫と努力とを惜しまなかった。

加賀藩主前田利長から高岡城の築城を命じられた時、右近は五十七歳になつてしたが、それまでの経験を存分に生かして城づくりの土木工事に取り組んだものと思われる。

歴史遺産学の専門家は、「高槻城と高岡城とは、共通したものがみられる」と述べているが、右近が両城の築城にかかわりを持っていったという事実からすると、大いに頷けることである。

百三十数年前に姿を消してしまつて、いまや幻の城となつてしまった高槻城。高岡古城公園を訪ねてみることによつて、多少なりとも現実味のある想像をしていくことが出来るのでは、かすかな期待を抱くのである。

問、文章の中の「①」に当てはまる言葉を、次のア・イ・ウから一つ選んで下さい。

- ア、一重の堀
- イ、二重の堀
- ウ、三重の堀

No. 25号芥川だより、クイズ「幻の高槻城」の答。

ウ、鉄道の土堤

あなたの街の電気屋さん

ダイコク電化 山川 修

はじめまして、芥川商店街の電気店

「ダイコク電化」です。

初めての掲載ですので、簡単に当店の紹介をさせていただきます。

当店は、昭和二年二月一二日の創業以来電気一筋で頑張ってきました。歴史は八〇年になります。

当時、高槻には電気店が当店を含め三店舗しかなかったとの事。今やショップ店にとどまらず、大型量販店が乱立する状態となっています。そんな大型店には、大きさ、品揃えでは負けるかもしれませんが、地域に根付いたサービスとフットワークは負けません！何故なら、当店は地域の皆様の「電気係」だからです。

次に、当店の日頃の活動を簡単に紹介します。・・・例えば、

商品をご提案する場合、お客様の家の間取りを把握し、それぞれに合った提案をさせていただきます。中には、「もおくお兄ちゃんに任すわ！うちのことよう知ってるやろ！？」というようにお任せしていただく場合もあります。その分プレッシャーはありません

が、イメージ通りにご提案でき、お客様に喜んでいただいております。

ところで、世間ではすでに高齢化社会が本格化しております。私どものお客様も高齢の方が多いのが実情です。さらに、お独りで暮している方も少なくありません。

そこでお困りなのが、蛍光灯の取替えなどの天井を見上げながらの作業が一番怖いと良く聞きます。ちよつとしたことですが、これがなかなか高齢の方々には辛く、怖い作業なのです。

そこで、私も「電気係」が登場するのです。蛍光灯・電球を持って取替えに走っております。

また、お伺いしたときには、ちよつとした用事もお聞きし、「ついで用」をお聞きすることもしばしば。そんな、地域の電気係として日々励んでおります。

「こんなことできひんかなあ〜」とか「こんなことで困ってんねん〜」といったご相談も賜ります。

お気軽にお声掛けてください！

今回は、初回ということで、自己紹介風になってしまいました。今後は電気のお役立ち情報や便利な商品のご紹介などを発信していけたらと考えております。

ご一読宜しくお願い申し上げます。

私たちはみなさまの「電気係」です

どうぞお気軽に声をおかけください

よろしくお願い申し上げます

ダイコク電化



2008年7月11日(金)にリニューアル・オープンさせていただきました。スタッフ一同、心よりお待ちしております。

女優・松井須磨子(6)

新劇の女王といわれ、女優の第一人者となつた須磨子だが、その演技については酷評もある。

*

おばあちゃんは隣席の女性に「どうもありがとうございます」と礼をいいながら頭を下げた。その女性は何げんな表情を浮かべている。千寿子の手をよく見ると、白いものはハンカチだった。

大正時代は松井須磨子のほかに、与謝野晶子、柳原白蓮、田村俊子、伊藤野枝といった女たちが、奔放にまた烈しい恋に生きた。晶子は「若くして心うつろわぬものは痴呆にひとしい、年若い心うつろわぬものは老衰の兆候である」という。晶子自身、四十二歳のとき、鉄幹から心が離れ、有島武郎に恋心をいだいたことがある。鉄幹に連れ戻され、けっさよく思いを断つのだが。

劇作家岡田八千代は三点あげる。第一に、「うまいところにくると、こゝろなさい、うまいでしょう」という素振りを見せる、それが嫌みである。第二に、気品の高い役には向かない。第三に、自分だけ観客に受けさせること。同じく劇作家の岡鬼太郎は、「女王須磨子嬢の舞台は、中流以下のワサワサしたる女に恰好なのである」といい、山本有三は、「目玉を動かすこと、正面をきること、手を前に延ばすことのほか殆ど能のない須磨子」と酷評している。

千寿子は養家のおばあちゃんから、このような須磨子の哀しい物語をよく聞いていた。おばあちゃんは須磨子と同世代でもあり、女優になる前、いつとき須坂の同じ空気を吸い、店先で言葉を交わしたこともあった。遠くを見つめるような眼で思い出すように語るおばあちゃんの話しぶりには、須磨子にたいして何か特別な思い入れがこもっているように千寿子には感じられた。

千寿子はこの日、止痛で頬がはれていて、そのはれを癒すために濡れたハンカチを当てていたのだ。齒の痛みを忘れるほど、舞台上に夢中になっていた。それから数年後、戦争が終わりしばらくして、須磨子をヒロインとする映画が東宝と松竹から封切られた。東宝は「女優」というタイトルで須磨子は山田五十鈴、松竹は「女優須磨子の恋」で主演は田中絹代である。千寿子はおばあちゃんと二人で、松竹の「女優須磨子の恋」を観た。

有島はその二年後、二人の子を残して、婦人公論の記者波多野秋子と心中を遂げる。須磨子の自殺を耳にしたとき「無性格者の死だ」と評した有島は、「私たちはもつとも自由に歓喜して死を迎える」と遺書に記して、秋子と情死した。

時雨は、「マダム貞奴」(明治美人伝)のなかで、「松井須磨子の名は先輩の彼女(川上貞奴)より名高く人気があるように思われたが、とても貞奴の盛時の素晴しかったのには及ばない。悲しくも年を取るといふ事が何よりも争われない人気の消長であるのと、よい指導者を持った、持たないとの懸隔が、あの粗野な、とても優雅な感情の持主にはなれない、女酋長のような須磨子を劇界の女王、明星とした」という。

そのときの他愛のないエピソードだけが妙によみがえる。薄暗い観客席で、千寿子は両手の掌で何かを丸めるように舞台に見入っていた。千寿子の指の間から白いものが見え隠れしている。おばあちゃんはそれを大福餅だと思つたらしい。「お隣からいたいたのかい？」と訊くと、千寿子は「うん……」と生返事をしながら舞台にくぎ付けだ。

このとき千寿子二十三、いくつかの見合いをし、養母から結婚を迫られていたころだ。ことごとく断つていた千寿子に、断り切れない縁談がもちあがる。その縁談から逃げるように「やまと」を去るときがくる。それは、おばあちゃんとの別れでもあった。二度と会うことのない別れであった。

長谷川時雨は「感情、感覚、全精神を打込んだ男女恋愛のどん底は魂の交感であり、命の掴みあいである。死と生が其処にあるばかりで何物をもまじえることの出来ない絶対のものであらねばならぬ」と。須磨子も、あるいは晶子も白蓮も野枝も、ほかならぬ時雨自身も「命の掴み」あう恋に身を投じた。抱月を失った須磨子には、文字どおり死があるばかりだった。

もし生きながらえていたならば、このような批評をはねのけるほどのエネルギーを傾けて、演技に磨きをかけたのだろうか。それにはやはり、抱月のような、自分を愛し無条件に受け入れ支えてくれ

付けた。おばあちゃんはその縁談から逃げるように「やまと」を去るときがくる。それは、おばあちゃんとの別れでもあった。二度と会うことのない別れであった。

夏山縦走

梵店主

例年夏に一〇日間程、剣岳の真砂沢でテントを張って岩登りをした。その合宿を我々は夏山定地合宿と呼んだ。剣の定地合宿の最終日の夕方には決まって打ち上げパーティーを行なった。一斗カンを棒切れで叩きながら「〇〇大学山岳部、無事定地合宿を終了しました。打ち上げを行ないまーす」と怒鳴りながらテント場を歩く。勿論こんな事をするのは一部の山岳部に限られているのだが、よっちゃん山岳部は例年派手にやる。S太からよっちゃんに「派手に言ってこい」と言われたので外へ出て、ガンガンと鳴らしながら怒鳴った。暫くして幾つかの山岳部のリーダー達が酒やソーセージを持ってテントに来る。丁寧にテントの奥に招き入れて酒を注ぎ、互いのクラブの情報などを交換するが、皆明日が早いから早々に帰って行く。打ち上げの最後は、応援歌と知床旅情を歌って終いになる。酒も多くないから酔うほどは飲めない。

次の朝は早く起きてテントをたたみ夏山縦走に移る。皆に荷物を振り分けてザックを担ぐが入山の時に比べればかなり軽くなっている。しかし、軽くなったと言えども四十キロは超えるから、一年に

は辛い縦走になる。

パーティーを二つに分けて、立山連峰を縦走して新穂高へ行くのと後立山連峰の唐松岳西尾根から針ノ木へ行くパーティーである。よっちゃんは後者である。リーダーのM蔵とよっちゃん、一年生三人の計五人が、黒部溪谷の日電歩道を抜け黒部鉄道の終着駅がある樺平を通り唐松岳西尾根に取り付き唐松から後立山連峰を針ノ木まで縦走する計画である。よっちゃんにとっては冬の縦走に比べれば問題がないように思われた。

よっちゃんは二年になったから、トップを歩く。後に続く一年の様子を見ながら出来るだけバテさせないように気を遣う。特に高巻きをする箇所や日電歩道は注意をする。ザックを岩角に引っ掛けたり、つまづかないように細心の気配りをする。日電歩道は黒部ダムを建設するために絶壁を掘った狭い道なので、落ちれば助からない。手すりなど無いから簡単に落ちる。大きなキスリングを担いでいるために、人が来たらずれ違うのが大変怖い。だから早く通過したいが長い水平道が続く。

テント場を六時頃出て、日電歩道無し事歩き唐松の西尾根に取り付いたのは昼前であった。近くには秘湯の露天風呂があるが、見向きもせず尾根の急な登りを喘ぎながら登る。直ぐに二人の一年が遅れ始めたが、よっちゃんの後について

来る有明は元気である。遅れ始めた二人をM蔵に任せて、よっちゃんは有明と先行した。暫く行ってもバテル様子が見えない有明を見てよっちゃんは一計を案じた。有明は一年の中で最も強くてバテたことがない。山岳部には一年を一度はバテさせて、自分の体力の限界や辛さを経験させるという掟があった。

よっちゃんはこのルートなら危険性は少ないし、後のメンパーからしても、もう少しでテントを設営して今日の行動は終わりになるだろうと考えた。それなら、ひとつ有明君に少しバテる辛さを味わってもらおうか、と考え、歩く速度を微妙に変化させたら、案の上、有明はよっちゃんに付いて来れなくなったのでよっちゃんは歩くのを止めて有明を待たせた。「どうや、疲れたか」と声を掛けたら「疲れました」と元気がなく腰を下ろした。その落胆振りを見てよっちゃんは悪い事をしたなあと考えた。山岳部を辞めるんではないかと心配した。新人達は夏山が終ると退部するのが多かつたらだ。

一時間ほど待って皆が登ってきて捕ったところでリーダーのM蔵は「ここでテント張るか」と言った。「問題は水やな」と言いかけたので、よっちゃんは、「沢を下りて汲んできます」と言っ、にわか雨が止んだ尾根の斜面を下った。一面熊笹が生い茂り雨で滑りやすい、半時間ほど転がるように下りたが、水場まで行けなかった。引き返したが、背丈もある笹をかき分けて急斜面を登り返すのは恐ろしい。テントに帰り着いたが少しの水も持ち帰れなかった。M蔵も困って思案していた時に、にわか雨が暗闇の空から落ちてきた。M蔵は狭い道に張ったテントを伝う雨水を食器ですくい始めた。直ぐに雨は止んだが皆がすくった水を集めたら何とか飯が炊けたので、簡単な夕食を食べて寝た。翌日、早く唐松岳に登りたかったが西尾根は長大で重いキスリングを担いで登るのは大変だった。稜線に登った後は、鍛えた体力と根性でマラソンをするように、ガタガタとキスリングを揺せて走り出す。担ぐ荷物が軽くなる為、合宿の後半になればバテル一年もいなくなる。一年には合宿の終りに食料の残りが全て与えられるので下宿住まいの貧乏学生には何より嬉しかったものだ。山では一日、二百五十円で食べられるが、下界では高くつくので早く山へ行きたいと言う東京・浅草出身の一年もいた。

よっちゃん達は、昔の優雅な先輩達に比べれば貧しい生活をしてきた。山岳部に入った為仕送りを止められたが辞めずにアルバイトで食いつなぎ、山岳部を続けたのもいた。このように貧しい下界の生活よりも山での食事が遥かに豊かであった。

「今を生きる」

母の介護をして「老人には今が最善なのだ」と思うようになった。

例えば、歩く事。加齢とともに足腰が弱まる。そこで車椅子を降りて歩くのを母の日課とした。

杖について百ほど歩くのに三十分ぐらいかかった。しんどそうだった。最後まで歩けなかった時、問はず語りに言ったことがある。

「人間の体って、えらいことになりま

すのやなあ〜」

でも歩き切った後は嬉しいそうだった。清々しい顔をしていた。

その母が歩けなくなったのは、老人ホームで、夜中に便所に行こうとして、転んで大腿骨を折ってからである。歩けなくなってから、急に惚け出した。

介護をするまで、私は「より良き明日のために」生きていた。しかし今は「今を精一杯生きよう」と思うようになった。(龍)



一八〇〜二五〇字くらいで
あなたの心のつばやきをお寄せください

俳句

養女

○ 畦道の豆の実はじけ休耕田

○ 川床やひときわ涼し貴船川

○ 稔り田に熱き風や天異変

○ 秋風を身に受け細胞生き往きと

○ 国中を照らしてあまる今宵月

○ となり人声かけあつて月団子

直子

○ 涼やかにそして妖しき女面

○ 岩手路の賢治居そうな花野かな

○ 学僧の白き踵の爽やかに



カムバック・アゲン

新連載

爺捨て山 ②

梵店主

ロマンスグレーの髪型が良く似合
い、いかにも紳士な風貌で笑顔を絶や
さず、人の輪の中で皆の気持ちの流れ
を読みながら当面する問題をわかりや
すく解き導きながらその場を治めてい
るKさんが、入院されたと聞いて見舞
いに出かけた。

白いベットに腰かけた姿は、いつも
の紳士で穏やかな笑みを浮かべ、これ
までの表情と同じである。

「全く気付かなかった。夏バテだと
思っていたら違ったわ。タバコを吸つ
て酒を飲んでいいるから、肺に行かなか
ったタバコの煙が酒と混ざって食道の
粘膜にへばり付いたんやろか。あんた
も気づけや。」突然、静かに忍び寄って
巢くった魔物に犯されているのにもか
かわらず、落ち着いてわかり易く話を
してくれる。こちらの心の揺れを気づ
かぬような素振り、いつもの笑顔。

この人が魔物と闘っている心底を思
えば、次の言葉をどう繋いでいいのか
判らず静かな時を見送る自分がいた。
やはり、このおっちゃん、多くの
人が議論し熱気が沸騰する男達の輪の
中で、笑顔で穏やかな語り調子で立ち
回っていた方が似合う。そんな白い病
室にいる人、ちやうで！ 復帰を切に
願う。(轟)

私の描く構想は、田舎の無人化した
山村に老いた男達の楽園を作ろうとい
うものである。

老後を有料老人ホームで過ごせる方
や優しい家族の世話を期待できる人な
ど恵まれた環境下に在る人には関係な
い話である。また、すでに病院にて介
護を必要とされていて自立した生活が
不可能な方も無理な話である。

簡単に言えば、今は元氣であるが将
来、人からの世話が期待できないか、
世話になりたくない人。金は無いほど
未練が無くて良い。

この山の大きな特徴は、一人当たり
五百坪程の山野を独占して使用できる
ことだ。共有スペースは設けるが、基
本は一人の五百坪だ。木は沢山あるか
ら、小屋を建てるのも自由だが、基本
は一人でやらねばならない。畑での野
菜栽培も自由だ。これも一人で作る。

なにもやる気がなければ、飢え死に
なる。絶食して死ぬのもひとつの作法
だ。そう、ここは死に場所でもある。

私は絶対に、ベットにくくり付けら
れて、点滴や人工呼吸機を付けたまま
で死にたくない。野たれ死にであつて
も、自由に堂々と人生を終えたい。

(続く)

老いの影は音もなく忍びよる

寿命あるまで生き抜く。自分の死に方を、自分で決めるなど、一度も考えた事がない。

私、毎日主人の顔を見にゆくことで、今日が、晴れたり、曇ったり、雨になったり。

天気予報士みたいな自分である。

機関車のようにヒマを惜しんで力いっぱい生きた人、愚痴を言わず、陰口言わず、骨身惜しまず生きてきた人、そんなあなたに何んでこんな病気が……、それは音もなく忍びよつてきて、肩をたたいていたのに、あなたは気付かなかつたのよ。

私達は、口には出さないけれど、あなたの顔を見てたらわかるわ、死が近づいていることも知っている。そして、死ぬことの怖さ、淋しさも……。

「何かバアさんに話しておきたい事が山程あるのさ、聞いてくれるかい」と言っている。聞いて何になるの。でも声が出るのなら聞きたい。イヤ、このままでいい。

あなたのよいことばかり思い出して、精いっぱい生きてゆこう。そして、あなたに恩返ししなくちゃ。でも、老いの影は私をいじめてくる。あの日、あの時を。

「いろいろと、お世話になりましたなあ」と誰にいうともなく、つぶやきましたね。

思わずあたりを見返りましたよ。私一人しかいないのに、あつ、私にいつてくれたんだわ。あの声、あの言葉で、遮断機が音もなくおりました。

でも、私には残された仕事がある。あなたを最後まで見守ること。

私の愛情のかけらを発揮しなくちゃならないのです。

お別れに、あなたに大きな声で、「ありがとう」

と言いたい。

その日は、もっともっと遠くにいてほしい。

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 今ひとたびの 逢ふこともがな

(百人一首より)

映画「歩いてても 歩いてても」の中から

誰もが何かの悩みを抱えている。そして、かみ合わない会話、順調なだけの人生などないのだという事も知っている。が、それでも一日は過ぎ去ってゆく。生きている限り、人は老いてゆく。そして、死も必ずやってくる。

とどまることのない現実の中で、ふつと心温まる時間がある。

「朝雨は女の腕まくり」

(朝の雨はすぐやむ。女が腕をまくって怒っても、たいした事はないという意味)

裏切らないのもある。

今日は晴れている。ヨージ、茄子を取ろう。鈴なりになっている。ヘタのすぐ上をハサミで切り取った時、ズシッと手に重みを感じる。漬物か煮物か、酢和えか。想像たくましく足は急ぐ。茄子の花は必ず実をつける。

「親の意見と茄子の花は

千にひとつの仇(無駄)はない」

紫色の花の下には必ず小さくとも実がついている。

人のせいにしてまで

後期なら

高貴で生きる

絵を描こう

編集後記

これから編集者としての手腕が試されます。原稿締め切りから一月ほどの編集時間を設けて余裕ある作業を考えていましたが、現実は一週間で編集から印刷・発行をするあっぱいです。まあ、そんなものだと思います。苦にもせずやってまいります。

なにより嬉しいのは、有料化に対する皆様の温かいご理解です。さらに皆様のご協力を頂けるように内容を充実させていきたい。読みごたえのあるミニコミ誌であるように。

新たなホームページも開設して、毎日ブログも更新しております。気軽にアクセスして楽しんでいただければ幸いです。(喜)

<http://www.justmystage.com/home/akitagawa/>

10月の芥川商店街の催し

★秋の大売出し

10月1日～5日

★第17回 亀屋寄席

10月5日(日) 11時開演。

割烹旅館 亀屋

電話 072-685-0123

※

鉄板焼居酒屋 和歌 オープン

17時～23時

※

★10月6日(月)～8日(水)

「かるく・はおる」

着物から風を羽織るようなイメージで、ブラウス・ジャケットを作ってみました。

着物から服を仕立てます 梵～ほん～